

の爲めにも一層頑張らねばなりません。愈々不惜身命の聖訓に遵じ御奉公に専念致します。

(一四、七、二七)

八月十三日編輯室到着檢閲濟航空使

## 護法の理念とその展開

田 中 泰 勵

私共の生存してゐる世界に於て、人間精神の表面的な智識を以て、人生に對する態度、それを以て能事終れりとなす事は近代文化人の特長であるかも知れぬが、それは又、大きな缺点でもあらう。丁度それは意氣込んでものを云ひ、大言壯語を立前へとしてゐる人間程、自信のないのを暴露する事が多いのを見る様なものである。而して常に種々の智識を求める人間の智識欲、そして得られるものに就て觀るに、將してそれが眞の満足を齎すかと云ふ判断は自己そのものである。換言すれば、外界に何物かを求め奔走してゐる私共は純粹なる自己を探索

してゐる事に氣付くのである。凡そ實相と云ふものは夫れ自身が示すものであつて、私共がその知覺に感心してゐる場合、その實相でないと云へば、これは詭辨であらうか。私は一念三千の云ふ法門に對して、人間が己れの腦髓の組織とその作用に何時も驚嘆してゐるだらうかと誰人にも尋ねて見ようとする衝動に馳られる。且つ此處に横はつてゐる「聲色の近名をたすねて無相の極理に入る」と云ふ宗教の概念の世界は、人間の事實批判の外に沈黙してゐるのみで、一切の論理も同じくその世界の價値について沈黙して了ふだけで、法の意義を解釋して

見るのみでは、又、法そのが謎のまゝ、残されて何の働きをも擱めないのである。只、法の正しき認識は強烈なる求道生活以外に求める事は出来ない。そしてこの法と、法を感じる人格とは相即不離である。現實の此の世界に生れるべくして生れた吾々人間は、何處でも、何時でも與へられたものに對して反省と云ふ努力を加へなければ現實と理想の矛盾と、血みどろな苦しみの路に、單なる動物的感覺の刺戟と一切の虚偽の記録に終るだけであらう。虚空の漠々たるよりは、人間は不完全なりとも地上に一線を描かなければならない。そして如何なる馬鹿であつても、人から、この馬鹿奴と罵られたならば眞劍に怒るのも皆、佛性を持つてゐるからである。この佛性の開發は信仰の生活であり、人間の深い内面の欲の根本なるものは、無限の統一と平安であると認識せんとしたのが菩薩道の精神であつたのである。人間の欲望の充たされざる惱み、地上の一切の虚偽の底よりこの大地へ出現した地涌の菩薩達こそ、眞の宗教的人格として吾々は崇

敬し、その受持された妙法五字を信行して、無限の統一と平安の境地へ至らんとしてゐるのである。

寔に法は、弘める人と離れた時、法は單なる思辨、教訓として枯れ無意味なもの法である。何者、生ける法なるものは人に刻まれたる法であるから。宗祖の色讀は即ちこれであり、御遺文の全部は體驗された日記であると云ふのはこの意味である。宗祖の眼に映じた人間の眞の相は、妥協的な反省や智識を徹して表はれて來るものでなかつた。人間はその業障我の爲めに、妄想の齋す苦と人間の破綻と、死の影にすがりついてゐるものであつたから。故に斯る人間をして眞の安心立命を得せしむる爲めには、人間の深い執着たる我を打破つても人間は死に至るべきものでないとの、大慈悲の折伏は毒鼓結縁、下種題目の唱導實踐となつて現れた。即ち信の體驗によつて久遠の生命へ直參せんとする三國佛教史上、コペルニクスの轉換を示した提唱であり、活佛教である。此の起死回生の方法は、佛教によつて人生の苦樂哀愁を傍觀視す

るものでもなく、又、死の脅威より逃避する事でもない。否、本化佛教の信の血脈相承によつて先師先哲、又熱烈なる信者は、信する事によつて殺されてもゐるではないか。この熱烈なる信の體驗を離れて本化佛教の世界、解脱の妙用は現れて來るものでない。宗祖は自行化他に亘つて、世界と共に信行し、主客を離れ、有相無相を離れ生佛を分かつたず、只、ひたすら南無妙法蓮華經の世界を展開せられたのである。即ちこれは歡喜と慈悲と努力との結合の上に立つた大人格の活動である。地上の佛教として建設すべく、如來の敎宣によつて現實の底を貫いて出現された宗教的人格は不動八風の信念を日本佛教史上に残し、熱烈なる火の如き改造と淨化を持つて人間の現實の世界を佛世界迄、止揚された。あゝ、法に即するの人、人に即するの法、本化の法の逞ましき活動は、その中に智慧と慈悲とを秘めてゐること——現實の世界を止揚して無限的創造を開展せんとする宗教的人格の具現。今、私共は主客合一せる宗教生活を反省しなければ、六

百六十年後の今日、宗祖の前に立つ事が出來得ない現狀であると思ふ。何者、文明の燦然として進歩した今日ではあるが、知識偏重の人々が認識、判斷、推理に基づき智性を以て、宗教を批判し、而して露骨に宗教界を攻撃する矢石に對し、餘りにも低調なる生活を繰返してゐるからである。——宗教本來の使命は「安心の問題」の上に展開されねばならぬのであつて、この現實に展開する宗教問題は數多いであらう、けれども國家の成佛、引いては世界の救済を內在する本化佛教即、日本精神運動がその中心問題である事を、吾々門下は再認識しその行動の中に解脱の道を見出してゆかねばならぬのである。即ちこの純正なる本化の信念に基き、現下、國民の進みゆくべき新精神をして躍進日本の軌道を踏み謬らしめない信念と行動の準備が、宗教家の立場である。然し乍ら、その現狀は？

現在、支那事變を契機として全體主義的運動、日本精

神運動の興起となり、各宗派活動も佛教の傳統と共に、日本國民性を除外しては行動し得ないのである。尙ほ且つ反宗教的機運もはらんでゐるからして、新佛教指導精神を、宗派それぞれの立場より樹立して興亞の大業翼賛に参加しなければならぬと同時に、各宗派は各々の宗學の上に於て新らしき時代に即應せる宗學再建の努力をも示さなければならぬ時でもある。而して現代に少なからざる感化を及ぼしたる「汝、吾を見んと要せば、尊皇に生きよ、尊皇精神ある處、常に我在り」との絶筆を残した「大義」の著者、杉本中佐は熱烈なる天皇中心信仰を保持してゐた。その語録の中、次の如く云つてゐる。

「現代の宗教家は信仰信仰とやかましく云ふが、その信仰が間違つてゐる。佛教家は佛様とか、大日如來とか、阿彌陀様とかを信ぜよと云ふのであるが、さう云ふ信仰は宗教に捉はれた信仰である。日本の佛教は天皇陛下中心のものでなくてはならぬ。それでなくては日本のものでない、活佛教とは云へない。佛教と雖も日本の國躰に

叶ふたものでなくてはならぬ。釋尊の教へも亦、其處にあるのである。(一六〇)乃至、日本の佛教は悉く木尊様を天皇陛下にしなくてはならぬ。信仰と云うても日本の國が亡んで何處に信仰があるか、若し信仰が成立するとしても國が亡びて了つてはどうする事も出来ぬではないか。日本人としての生活の上に初めて信仰も成立するのである。(一六一)と。

中佐は臨濟宗佛通寺派管長、山崎益洲師に隨つて參禪した人であり、以上の言葉は山崎師が大義の著の後に附録として杉本中佐を語られた語録の中の初めの一節である。今、中佐の言葉に對して批評も差控へるが、後に到つて中佐の言葉を引用した意味も理解して戴けるであらうと思つてゐる。何を申せ佛教者は時勢に目醒めなければならぬ。一種ねぼけた催眠状態であつた宗教界が新時代に適應した信仰安心を持ち民衆教化を爲し得ると確信してゐるのは良いが、心ある思想家、居士或は反宗教思想家より國策への無信念なる追従を笑はれ、非生産的

存在は宗教家であると云はれ、或は往古の鎌倉佛教を再検討せよと示されてゐる。此の有害無視され掛つてゐる既成教團は只、徒らなる内輪の醜争を繰返してゐるのみである。宗教がお役人に道具扱ひにされ乍らも椽の下の方持ちであると思ひ乍ら、これが宗教家の生活意識であると満足してゐるのは良い事である。然るに「現在の佛教團體の中には佛教の使命を果すよりも寧ろ社會の重荷となつてゐるものが多い。速かに舊來の非を清算する改革は教團の道徳的淨化に在る」と民衆より矢石を放たれてゐる無信念さには轉た感慨無き能はざるものがありはしないであらうか。

「此の世に於て新紀元を造るには。明かに二つの條件がある。第一に頭の良い事、第二に大きなものを相續する事だ。ナポレオンは佛蘭西革命を相續し、フリドリツピ大帝はシユジア戦争を相續し、ルーテルは坊主の無智を相續し、私はニュートン説の誤謬を繼いだ」乃至「私は

十八才でなくて幸福である、私が十八才の時には獨逸も亦やつと十八才であつた。その頃はまだ何かとする事があつた。然るに今や萬事が信じられない程進歩し、どの方面も鑽されてゐる。私が今、斯う云ふ全く完成した時代に於て、若くないと云ふ事を天に感謝する。若かつたら私は此處にぢつとしてゐられないであらう。中略、人は常に古人の研究をせよと云ふ。然しそれは現實の世界に注意しそれを表現するやうにせよと云ふに過ぎないではなからうか。何者、古人も又、彼等の生存中にさうしたからだ」

以上はゲエテの言葉である。ゲエテならずとも時代の進歩と共に文化、智識の進展は偉大なる文化組織の變貌を遂げ、各々その文化組織の中にあつてその位置についてゐる者は、その任務が何邊に残されてあるかと云ふ事を認識し、それと同時に少なからざる惱みを抱かざるを得ない。宗教の領域に於ても宗教が知的逃避でない限り新らしく生長した時代に應じて宗學の純粹理念の展開を

文化の發達につれ化導効果の上に於て、その宗學の獨自尊特性をして民衆に光被せしめる様、宗學の活眼運用を企圖し實行化しなければならぬ立場にある。自分は今若くて幸福であると云ひ兼ねる宗門信念の危険なる現状ではあるまいか？ それに應じて日蓮宗の最高學府に於ても新興宗學の堅實無双なる再建を怠らねばなるまい。少年の教育なれば局限された小さな範圍で、つゝましい思想を以て育て、も良いのであるが、知情意の自覺と共に心身共に成熟した青年の教育にはごまかしもきかず頭からの命令も、幼稚な思想も一笑に付する位の事である。即ち宗教的要求の満足と、心の本質的な依存を欣求する、換言すれば涅槃と法界と自我の實質を求めて止まないものである。解脱の要求なるものは佛教の根本問題であり、平時、非常時を問はず、能化、所化の間に在りて自利他利同事の菩薩道の精神もこれを巡りて演繹の普遍的に開展してゆかねばならない根本基準であると共に同時に歸趣する處でもある。古代に於て一切智識の綜合とし

て權威を持つてゐた宗教は現代にも權威を持續してゆかねばならない。現在、興亞翼賛の途上にある佛教各宗も大陸工作に夫々、豫算を組んで動員し國策の線に沿つてゐる事は望蜀の難はあつても大變結構な事であるが、國內の宗門の現状にも注意する必要ありはせぬか、時代に音頭を取られるよりも足下をよく見て、佛教者としての根本的任務に自覺してその任務を實踐する事が一番の興亞翼賛の方法ではなからうか？ 宗教家自身が確固たる宗教信念を抱いてゐる限り皇國日本の向上的進展の上に於てより以上の文化へその有意義なる運動を爲し得るものであると信じてゐる。且、我が宗門の四海歸命を期する上に於て宗門の安心たる即身成佛娑婆即寂光の實踐的運動も他家不共の三秘の高揚にかゝつており、現時興起せる皇道精神は六百餘年前既に實踐し、國體の開顯と共に三度迄も諫曉された立正安國の主張である。而して私共は理性の底にあつて迸る本化根本信の脈動を感ぜずにはおられないであらう。新興宗學も文化的國家的に檢討

し、王佛冥合の宗學的方法論を以て辯證法的に發展され  
て行かなければならない。當家の宗學は觀念的でなく人  
間學的佛敎であり且又、文化主義的佛敎でもある。佛敎  
の原理が獨斷論と見做すはその客觀眞理に普遍性が無い  
からである。而して從果向因の神觀は、人間學的な佛陀  
の理想を説く涅槃に到着せんとして地上の佛敎を建設せ  
んとする從因至果的行門の態度に強烈なる根本信の脈動  
と向上がある。觀念的であるよりも人間學的佛敎と云ふ  
所以はその現實性に於て客觀眞理をより多く含んでおり  
よりよく發展し得るからである。本化佛敎が宗教として  
生起し存立してゐるのも最も偉大にして顯著なる特殊性  
故に存在してゐるのであつて、國體開顯の重大なる鍵を  
藏してゐるのも當然であり王佛冥合の關係も既に先天的  
なものである。私は本化佛敎と國家の興隆との關係に於  
ても吾々宗門の安心の問題は重要な位置を占めると共  
に、それが内外に及ぼす影響が現今只今、多大なるを實  
感してゐる。換言すれば國家の興隆をひたすら願ふ者は、

「先ツ國家ヲ祈リテ佛法ヲ立ツベシ」

「惡シウ敬ハバ國亡ブベシ」

と敎示せられた宗祖の御文を拜し、世界と共に法華經を  
行じて世界人類の救済を念じ、迫害を自らの尊い宗教的  
體驗とせられた宗祖にとつて、この敎示は單なる觀念で  
なく恐多くも直接體驗の聖なる宇宙眞相の默示である事  
を知らねばならない。故に宗門の信念を生かす事に依て  
國家興隆の教義的統制を計る事こそ本化宗學再建の重要  
骨子であると同時に、一大理想主義の信條を掲げ、世界  
をして本尊に融合統一し人格的眞善美の體驗世界に融攝  
理想化し實踐行動せんとする吾々の手は、墮性の一掃は  
云はずもがな、現在足下の急務は、國家興隆の進路の上  
に立つて皇道精神の理念とその理想實現をば、世界人類  
の歸趨する吾々所信の正境と、これに依つて實現せらる  
べき自己安心の確信の上に並列相互扶助的に、その絶對  
の存在價值を再認識しなければならぬものである。然  
し乍ら、宗祖の「當身ノ大事」たる聖なる魂の表出され

たものを敢て冒瀆する者は反逆法師である。故にその教義的統制の具体的内容の上に於て、意圖すべき處は、王佛冥合の大義を、事實批判の理性と、價值批判の認識とを以て掘り下げ、國民信念を、同時に本化の信の血脈を強調する一点に掛つておらねばならないのである。此處に於て客觀眞理をより多く含み、よりよく發展する事が出來得るであらう。随つて日本佛教としての本化佛教の權威とその眞面目を發揮し、その化導門に於て宗風を宣揚し、教線の擴張もより効果をあげ發展し得る事、火を見るよりも明らかである。

今、聖戰下に於て、彼の支那大陸も四分五裂し、汪兆銘を首班とする新政權が樹立し、汪兆銘は日支提携を叫び、友邦日本と呼び、提携の思望を打開けてゐるのである。然し國民相互の、人間同士の堅き握手が交はされるのは何時の事であるかは、帝國政府の外相でも豫期し得られないであらう。眞の提携なるものは、國民同志の使

命を自覺して、建國の文化的、世界的使命を成就する上に結束する事が出來て、始めて信念上の共鳴であり得る。而して本化佛教の歸趣する王佛冥合なるものは既に、その關係は先天的なるものである、何者、畏れ多くも天皇の大稜威によつて佛教が今日あるのであつて、皇道の宗教的表現が佛教であり、歴代の皇室と佛教との密接なる關係によつてその根本的認識を爲し得るのである。皇運を扶翼し奉る宗門活動の護法爲國の奉仕は不惜身命であること云ふ迄もない。而して當家の不惜身命の實踐、その行法なるものは、無作本佛への報恩を以て脈搏を打つてゐるものであり、即ち從果向因的立脚の上にあることを。即身成佛娑婆即寂光は立正安國の大義で貫透された地上最高の佛教を意義づけてゐるのである。——最近に至つて、本化陣營内に、本門の三大秘法を皇道の三大秘法となし、新興宗學の立場とした皇道佛教行道會が出現した。而して宗門の注意を浴び問題化されつゝある。或る者は異流と云ひ、或る者は異安心と云ひ宗義の邪道



であると指摘した。その成立意圖の問題はさて置きその主張と實踐は當家宗學の上より検討されねばならないであらう。私は此の小論の結論から云つても、愛宗的理念を以て検討しなければならぬのである。何者、筆を起してより一貫してゐるものは「安心の問題」であるから。然し乍らその宗門當局は今、検討中であり、宗政上に及ぼす影響も現在微妙なるものを感じてゐる私は、その批判を遠慮するのが妥當であると考へてゐるから差し控へたい。と同時にこの小論の筆を起したのも、この結論の爲めであり、書きつゝある時間も一兩日の間である。而して或る時間の上に起つたこの思念をその儘、象徴的に、直觀的な思惟によつて書き止める結論を許して戴きたいのである。――

此の理由は王佛冥合の正しき理解にあるから。宗祖は法界無相不可思議の妙法の相を有相化されたからして、その十界大曼荼羅を自然、文化、國家的三組織の上より具體化した國體曼荼羅に置き換へる事によつて正しき王

佛冥合を理解する事が出來ると主張し實踐したその理解について今、結論への筆を取つてゐるから。本化佛教の低調は只、自滅の道あるのみ。宗祖の法華一乘の戒壇、此國に立つべき瑞相也と豫言せられたのも、皇道の故に外ならない。吾々門下の慎しむべき事は宗祖の魂を、本化の大法を汚してはならぬ事である。況んや一日蓮當身ノ大事」を冒瀆することをや。吾々も共に地涌の一分であつて、神官ではない。高佐師の主張される如く、立正安國論の結勸の文は天皇本尊義の典據たるべきものであらうか。これ議論の豫地なしと斷定されるが、これ畢竟であつただらうか。如何に新興宗學と雖も、理性と認識の價值批判をさて置きその範圍を乗り越えての再建は出來ないのである。

本佛と凡夫との溫い一如――釋尊信仰の究竟たる本佛への信。これより外に歸依信仰の對象を求むる事は出來ない。大衆は無智である、赤兒である。但、愛の宗教へすがる。無限の抱擁力を持つた偉大なる佛であればいゝ、

のである。赤兒に對し、母が乳の營養學を説く事は不要である。況んや精神療法の講義なんか赤兒は理解、實行は出来ない。而して自然の力を以ての成育を待たねばならない。宗祖は將又、戒壇の題目なる義を説かれたのであらうか？

吾々日本民族が上下心を合せ、忠勇義烈なる結合力に依つて、東亞興隆を目指して進軍してゐる。而してより高い文化の統一へ構成發展せしむるもの、信仰統一運動へ拍車を掛けるもの、即ち本化の宗教戦士であらねばならない。何者、眞實の宗教とは最高のそして最後の統一であらねばならないから。吾々の讃仰すべき宗教戦士は人類愛を人生に表現せんが爲めに、彼等救はれずんば、吾も共に地獄へ行かんと説いた。「毎自作是念」の悲願はこの宗教に於ける相互救済の原理であつた。斯る原理を内含する宗教の戦士の求道の道は、絶對の信を強く持續せずして、その最高なる安心の行道を全うし得ないであ

らう。何者、解脱の妙用に歡喜するこの原理の信奉者は何時でも、生死を使役して恐れないからである。吾々の宗教は目や耳や口を樂しますものでないからして、その化導の門は技巧や、誇張や、見せびらかしてはない。若し、そうであるならば、私共は、扮装術を、透視術を、將又、催眠術をも學んで應用するであらう、それが近道である。吾々は法義の深き事にのみ酔ひしれてゐる時代でもないであらう。

而して眞の宗教に於ける毎自悲願の相互救済の原理を指して——この世界に於ける永遠の課題であると誰か云つた。私は今、悲愴なる情熱、壯嚴なる秩序、その意義の下に「永遠の課題」であり得ると斷つて置きたい。此の名は無信念な人には云ふ事を遠慮しなければならぬ場合も多いのである。それは丁度、眞實を云つて人を死なす場合とよく似てゐる。この悲愴にして壯嚴なる境地。首の坐に据えられ給ふた吾祖の遺鉢を受け承ぐ熱烈なる先師達は、大苦の中に尙ほ倦まざる願望と、そして喜悅

とを見出して法に殉じて行かれたのである。諸君はデカルトの到着した命題を記憶しておられるであらう。私は今、この永遠の課題を骨髓に刻み込める事が出来たのもこれひとへに本佛の大慈悲と默示の庇護であると信じそしてこの課題に向つて不惜身命の奉仕の何んと喜ばしきかと、大きな悲哀を包んでこの法悦の前に膝まづいてゐる。信仰の大事は、法の因果を知る事にある。本因本果の如來の、本行菩薩道と常住不滅の南無三寶。此の一大事因果の寶塔の中に、苦しみ乍ら救済されてゆく、迷ひ乍ら攝取されてゐく眞の宗教の偉大なる活動を見よ。釋尊の滅後三千餘年、未だ衆生は救はれないではないかと思ひ、反抗する人は未だ信が徹底してゐないのであり、この課題は法華行者實踐の極致であるを知らない證據である。

即ち是れ寔に、宗教必然の歸結、愛宗的護法の理念の展開する最後の結論である。即ち相互救済とは、未だ成し遂げ得られざる大願望に喜んで殉じてゆく信念とその

行動の生粹である。私はこの悲愴にして且つ壯嚴なる底をついて湧き出づる知性と情熱を以て、始めて世界的なる愛の實現の宗教の力強き統一運動に参加し得るのであると信ずる。本化佛敎をして低調に妥協的にその權威を喪失してゆくのは、この湧き上らなければならない新らしき情熱と秩序との無視にあると云はなければならぬ。隨つて本化佛敎の最後の飛躍を促すものは、何者でもない、この新らしき情熱と知性の價值轉換によつて行はれるのである。

以上

